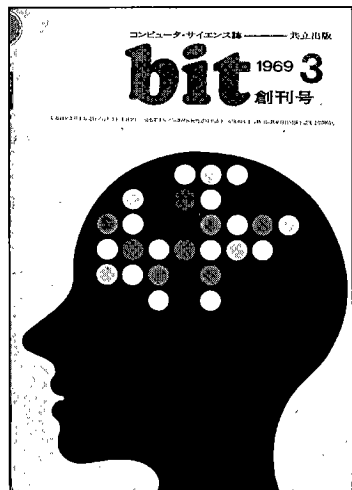


共 立出版より1969年から32年間にわたって出版され続けてきたbit誌がこの2001年4月号を最終号として休刊されることになった。実際は廃刊なのに、休刊という表現がとられるのは出版界の慣行である。休刊にするのは、将来新創刊の可能性がなくなること、同名の雑誌が他社により発行されるのを防ぐため、ということらしい。それはともかく、しにせの真面目な技術誌bitが消えてしまうのは残念でならない。



bit創刊号 (1969)

bitが休刊に追い込まれた理由は、同社からのお知らせによると、「7~8年前より、コンピュータ環境の大きな変化並びに国内の経済不況と相俟って販売部数がざん減してまいりました。... (略) ...加えて広告の激減は本誌存続に大きなダメージとなってしまいました。殊にここ数年は、本誌(含別冊)での採算がとれない状況となっております。」で、苦渋の選択をしたという。bitの浦山編集長からの2000年10月26日付けのメールによると、編集部にとっては晴天の霹靂だったようである。最近では当会誌がbit寄りになってきたのも理由の1つという説もあるが、その影響もあったとすると、かつてはbitの編集委員をやったこともある私としては、申し訳ないこともある。なお、bitの連載記事のいくつかは本会誌で引き継ぎたいと共立出版に申し入れたが、許諾

が得られなかったのは、残念である。

コンピュータサイエンス誌 bitの休刊を惜しむ

石田 晴久

さてbitは、コンピュータサイエンス全域を対象としてきた。最近ではバイオなど境界領域の話題も増えていたが、初期にはプログラミングやOSやハードウェアの記事が中心だった。会誌と違って、チュートリアルが多いのも特徴だった。私自身もUNIXやCプログラミングの連載を書いたことがある。こうした連載が、出版社にとっても著者にとってもありが

たいのは、それが好評であれば、あとでまとめて単行本として出せることである。私のUNIXやCの連載記事も単行本となったが、bitがなくなってしまうと、若い著者は出版の機会を失ってしまう。これは出版元にも打撃であろう。

雑誌を出すことの利点の1つは、単行本では出しにくいテーマについて別冊が出せることである。別冊は、図書室などでは雑誌の一部として購入してくれることが多く、一定の部数をはげるのである。私自身が監修者・編者(あるいはその1人)として出したbit別冊には、ミニコン(1971年)、マイクロコンピュータのプログラミング(1978年)、パーソナルコンピュータの使い方(1980年)、ワープロと日本語処理(1985年)、コンピュータネットワーク(1986年、ARPAインターネットという項目がある)、最新UNIX(1987年)、Xウィンドウの仲間たち(1992年)、インターネットの使い方(1996年)などがある。そのほか、プログラム言語、emacs、ソフトウェア工学、データベース、TCP/IPプロトコル、インターネット運用技術、チューリングレクチャ、最近では、文字コードなどの別冊があった。これらの中には別冊だからこそ出せたものもある。別冊がなくなってしまうと、情報の専門分野の解説書が出せなくなる恐れもあり、学会としてもひとつごとではない。

bitの休刊が投げかけているのは、単に1雑誌の問題ではなく、ハウツウ本でない専門書の将来性である。本誌2000年11月号のインタラクティブ・エッセイでも取り上げられているように、専門書の刊行をどうしたらいいのかを検討し、オンデマンド出版の普及を図るなど、対策を至急たてなければならない。



bit最終号 (2001)

